

神永 昭夫

東京オリンピックの銀メダリスト



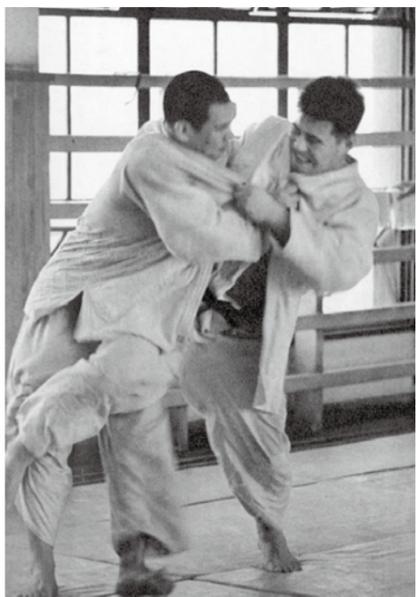
神永 昭夫
(出典:ナショナル (現パナソニック) 販売店向け広報誌)

昭和三十九(一九六四)年十月二十三日。

初めて日本で開かれたオリンピック。国技とも言える柔道の無差別級の決勝戦が行われました。決勝戦に臨んだのは日本代表の神永昭夫選手、そしてオランダ代表のアントン・ヘーシンク選手。金メダルへの国民の大きな期待が寄せられた一戦が始まりました。

昭夫が柔道を始めたきっかけは、高校一年生、当時はやっていた小説「姿三四郎」の大技『山嵐』にあこがれを抱いたからです。当時の日本は戦争に負け、柔道や剣道といった武道は学校で教えることが禁止されていました。ようやく武道の練習が解禁されたのが、ちょうどそのころでした。やっと始めた柔道も、華やかな投げ技は教えてもらえず、来る日も来る日も受け身の練習ばかりです。考えていた柔道とは違って、気持ちが悪くじけそうになったこともありましたが、何度か受け身の練習を重ね、受け身だけの練習から技の練習が許されたとき、基本が何より大事だということが分かりました。それから、練習の鬼となり、高校三年生になると宮城県大会で優勝するほどの選手となっていました。

その年、東京にある柔道の聖地、講道館で行われた紅白試合に腕試しのつもりで出場したところ、昭夫は次々と十九人も選手を破りました。これは講道館でも今までになかった快挙でした。この活躍に講道館は、初段から一つ飛びこえて三段に昭夫を昇段させました。翌日、大学での練習に参加させてもらい



母校で熱心に練習をする昭夫(右側)
(出典:ナショナル (現パナソニック) 販売店向け広報誌)

無差別級:
体重による制限のない階級。

姿三四郎:
富田常雄が書いた長編小説。柔道家として活躍する主人公が様々な対戦者との戦いを描いた。当時の小中学生は主人公が完成させた必殺技「山嵐」にあこがれた。

受け身:
投げられたり倒されたりした時、けがをしないようにする方法。

ぼう然:
あきれたり、びっくりしたりして、ぼんやりしてしまう様子。

ました。ところが、思うように技がかからず、昭夫は床が上か下か分からないほどに投げられ、ぼう然としてしまいました。昭夫は、「上には上がいるものだ。ぜひ大学で腕をみがきたい。もっと強くなりたい。」と、思うようになりました。後に、昭夫は、「勝負はいつでも負けから始まる。自分の弱さを知ったときから技の工夫が始まるんだ。」と語り、負けることを大切にするようになりました。

昭夫は九人兄弟の六番目で、東京の大学に進学することは、厳しい状況にありました。そこで、両親に学費のことで迷惑をかけないようにと考え、福祉施設に住みこみのアルバイトをしながら大学に通いました。こうして大学では勉強と柔道を両立し、施設では、子どもたちの世話をするという生活を四年間続けました。また、わずかな時間でも無駄にしないよう、電車ではつり革などにつかまらず、爪先立ちをしたり、手すりを利用したりして、体を鍛え続けました。そして、毎日こつこつと練習を重ね、柔道に打ちこんだ昭夫は、全日本学生選手権で個人・団体の両方で二度の優勝をするまでの選手になりました。

卒業して社会人になると、一日の仕事を終えたあとで練習します。そこで、昭夫は、誰よりも早く会社に出社して、仕事をきちんとして終わらせてから練習に取り組みうと考えました。昭夫の仕事ぶりを見た同僚から「練習があるから、早く仕事を切り上げるといいよ。」と言われることがしばしばありました。しかし、決して途中で仕事を投げ出すことはありませんでした。仕事を終えたとすぐに、母校の大学に向かい、一心に練習に打ちこみました。

その努力が報われ、昭和三十五(一九六〇)年、三十六(一九六一)年、東京オリンピックの行われる昭和三十九(一九六四)年の全日本柔道選手権大会でみごと優勝を果たしました。

そして、オリンピック柔道無差別級の代表選手に選ばれたのです。柔道が正式な競技として加わった初めてのオリンピックです。昭



東京オリンピック ヘーシンク戦に臨む昭夫(右側)
(出典「神永昭夫の奇跡-ガンバレ柔道ニッポン-」全日本実業柔道連盟)

同僚
同じ職場の人。

夫は決勝戦に進出しました。決勝の相手は、オランダ代表のアントン・ヘーシンク選手。身長二メートル、体重百二十キログラムの巨漢です。昭夫との身長差は二十二センチメートル。昭夫と組み合うと頭一つ分の体格差がありました。会場につめかけた大勢の観客やテレビで観戦していた多くの人々は、(どんな大男が相手でも、昭夫ならきつとあざやかな一本勝ちで金メダルを取るに違いない。)と信じて、熱い声援を送りました。

最初のチャンスは昭夫にありました。するどい投げ技にたおれたヘーシンク選手を押さえこみました。しかし、ヘーシンク選手は場外にのがれ、試合は組み直すことになりました。一進一退の激しい攻防は九分も続きました。昭夫が技をかけに行ったところをヘーシンク選手に返され、反対に押さえこまれたのです。会場も監督やコーチも昭夫に大きな声援を送りました。必死に技を返そうともがく昭夫。それを上からしっかりと押さえつけるヘーシンク選手。無情にも三十秒がたち、日本中の応援もむなしく、一本負けとなりました。

昭夫は正座をしながら無言でゆっくりと乱れた柔道着を直し、ヘーシンク選手と向き合い「礼」をして、試合場を後にしました。悔しそうに涙を流す監督やコーチたちとは対照的に、昭夫は涙を見せることもなく、むしろ表情は晴れ晴れとしていました。

その表彰式です。表彰台の上で、昭夫はヘーシンク選手に握手を求めたのです。その表情に迷いはなく、笑顔で勝者に手を差し出しました。ヘーシンク選手も昭夫の手を無言でしっかりと握り返し、互いに見つめ合いました。

試合の翌日、昭夫はいつもと変わらず、誰よりも早く出勤して仕



東京オリンピックの表彰台で
(出典「神永昭夫の奇跡-ガンバレ柔道ニッポン-」全日本実業柔道連盟)

事をしていました。その姿は、まるでオリンピックの激戦などなかったかのようなようです。おどろいた上司は、

「今日くらい会社を休んでもよかったのではないか。」

と声をかけました。すると昭夫は、

「会社があるから柔道ができるんです。皆さんに迷惑はかけられません。」

と言って静かに机に向かいました。

昭夫は、選手を引退すると、会社員としても力を発揮し、赤字部門を黒字に変えるなどの活躍をして、会社に貢献しました。

その一方で、自分を育ててくれた柔道の発展にも力をつくしました。大学や全日本の監督を任せられ、後輩の育成にも力を注ぎ、多くの優秀な選手や金メダリストを育てました。

昭夫はいつも、「人並みにやっていただけでは、人並みにしかたない。」と部下や後輩に話しました。そして、自分自身もその言葉どおりに行動しました。後輩や部下などの多くの人々が昭夫の生き方にあこがれ、昭夫のように生きたいと思いました。迷ったり困ったりしたとき、「昭夫先輩だったらどうするのだろう。」と考えたと言います。

ヘーシンク選手と昭夫の友情はその後も国境を越えて続き、互いに終生のライバルとたたえ合いました。

神永昭夫

昭和十一(一九三六)年仙台市に生まれた。昭和三十九(一九六四)年に行われた東京オリンピックで柔道の無差別級に出場し、銀メダルを獲得した。昭和四十一(一九六六)年に選手を引退し、全日本柔道連盟の強化コーチやオリンピックのコーチ、監督として金メダリストを多数育てた。会社員としても製鉄会社の部長職の重職を任せられた。

巨漢：
体が特別大きい男。大男。

九分も続きました(試合時間)：
現在は五分の試合時間で行われているが、当時は十五分の試合時間だった。

一進一退：
進んだかと思うとあともどりすること。

赤字部門：
会社の利益を出せない部門。

黒字：
会社の利益。

人並み：
世間いっばんの人と同じ程度である様子。

終生：
死ぬまでずっと。